

緊張場面での言動に自信をもって行動する子の育成

—— K・T児の生活単元との取り組みから ——

徳 田 純 子

1 対象児のプロフィール

生徒名 K・T(女) 昭和44年5月1日生(中学部3年) IQ44(WISC)

本校小学部より入学し現在に至る。

(1) 一般特性

明るく素直な性格で、誰に対してもやさしい。身辺自立もかなりできており、ほとんど自分のことは自分でできる。反面、恥しがり屋で、初めてのこと、自信のないことに対しては、決して自分からしようとせず、させようとする、下を向いて黙ってしまったり、動かなくなったりすることが多い。第三者が同席する場面では、特にその傾向が強い。

(2) 問題点を研究に取り上げた理由

緊張場面では、恥しいという感情が、やりたい、したいという意欲を上回り、行動に移せなくなってしまふ。そのため、学習が中断したり、中途半端のままで終わってしまふ、自分の持っている能力が十分発揮されないことがよくある。また、生活場面では、人間関係がスムーズに行かなくなるという問題点を生じている。

そこで、もし緊張場面でも、恥しさを克服し、自信を持って行動できるようになったならば、興味・関心・意欲が行動と結びつき、行動の範囲が広がるのではないかと、その行動できたことが自信となり、新しい行動場面でも生きて働く力となって、意欲的な生活態度が期待できるのではないかと考え、研究に取り上げることにした。

2 個人目標の設定と研究方法

(1) 個人目標の設定

K・T児の実態から、「緊張場面での言動に自信をもって行動する」という個人目標を設定した。そして、この目標に迫るために、生活単元を通して、

- ・言動を確実にできるようにしてから行動させる。
- ・緊張場面での抵抗を少なくしてその場面の克服に努力させ、自信をもたせる。

という2つの点から取り組んだ。

(2) 研究方法

K・T児は、第1学期学級委員、第2学期児童・生徒会副会長という役職についた。これらは、2つとも本人の意志によるものであったので、この役職を学習と結びつけて指導しようと考えた。特に生活単元の中の行事単元を中心に研究の視点をあて、リーダーとしての役割を与え前面に出て

行動する場面を多く持たせ、それをこなすことで自信をつけさせようと試みた。

3 授業の構成と手だて

リーダーとしての役割を与え、前面に出て行動する場面を多く持たせることを中心に授業の組み立てを各单元ごとに考えた。主な授業は次の通りである。

＜生活单元学習におけるK・T児の活動と手立て＞ ○印……主となる研究対象の学習活動

单元名	学習過程・学習活動の概要	主なK・T児の活動	指導の手だて
修学旅行	1 学習計画を立てる。 ② 日程などを知り、準備や下調べをする。 見学地の確認、日程表作り、お金の使い方 交通機関の利用等 ③ おみやげ・持ち物等の準備をする。 4 修学旅行に参加する。 5 思い出を絵や紀行文集にまとめる。	○移動する時や見学する時に皆の 先頭に立って行動し、集合時 には必ず人数確認をして報告。 ○自分の食べたい物・買いたい 物を自分で決め、お金を払う。 ○見学先・旅館等であいさつし、 おみやげを渡す。	○日程の場面・場面での 行動を追いながら、く り返し繰り返し、すべ きことを練習させた。 ○お金の使い方では、模 擬銭→現金を使って買 い物練習をくり返した。
秋季運動会	1 運動会のあらましを知る。 2 運動会の準備・練習のしかたを話し合う。 ③ 運動会の準備や練習をする。 ① 全体練習（行進、開・閉会式練習等） ② 組別練習（応援合戦、リレー練習等） ③ 学部練習（学部演技、百米走練習等） 4 運動会に参加する。 5 運動会のまとめや反省をする。	○閉会式でおわりのあいさつを 指揮台の上からする。 ○自分よりよく走る相手といっ しょに走る。 ○グループの中の小さい友だち 弱い友だちの世話をする。 ○組別の作業などにはすすんで 出て、みんなと協力してする。	○演技練習と並行してあ いさつ練習をした。学 級ではほとんど毎日、 中学部の中では演技練 習の時にというように 場のステップをふんで させた。また家庭にも 連絡して協力を願った。
学習発表会	1 準備や練習について計画をたてる。 ② 劇の練習をする。 3 合奏・歌のステージ練習をする。 4 全校演技の練習をする。 5 作品展の準備をする。 6 学習発表会に参加する。 7 反省会をもち、学習のまとめをする。	○中学部代表としてはじめのあ いさつをステージでする。 ○劇「おやゆび姫」で主役のお やゆび姫のせりふ、動作をし っかり覚え演じる。 ○朗読の文を覚え、自分の言う 場所をはっきり覚えて言う。	○配役決め時から意欲 を盛り上げるようなこ とばかけをした。 ○パート練習では個別指導 を行ない、一人で演ず る場面の練習をくり返 した。 ○家庭の協力を願った。

K・T児の指導に際しては、

- ① 学習場面の広がりステップをもち、場に慣れさせる。
- ② 反復練習することにより、学習事項を確かなものにし、自信をもたせる。
- ③ できた時、少しでも進歩が見られた時には必ず賞める。
- ④ まちがえたりして注意する時も、「～すればもっとよくなる」といった言い方に心がけ、決して気持ち落ちこませない。人前で恥をかかせない。

ことを柱において取り組んだ。

自分ができそうだと判断すると、「やりたい」とことばで言ったり、こちらの「できるかな」などの冗談めかした問いに「まかせなさい」と言うことが多く、そういう時には必ずさせるようにした。

4 指導実践例

(1) 生活単元「修学旅行」の学習を通して

修学旅行は5月末に実施されたが、K・T児は1学期学級委員であったので、そのリーダーとしての役割を活用した内容を学習に取り入れた。その中で特に集合時の人数確認と報告は、K・T児が一人でしなければならない行動であった。学習を始めた頃は、「人数確認」と指示を出すと、「えーっ」という拒否的な言葉がまず口からとび出し、先頭に立ってもじもじして数えようとしなかった。そこで、

- ・教師が人数確認の指示を出した後に「友だちはみんなで何人いますか、数えてみましょう」という声かけをする。
- ・一緒に声を出して数える。

というようにした。最初は教師の数える声の後をまねて数え、報告も口まねであったが、何度かくり返すうちに、「えーっ」という声は出すものの、次第に自分で数えられるようになり、人数報告も、「全部で?」という「5人います」と答えられるようになった。そして、実際場面では「人数確認」と指示を出すと、自分で数えてきちんと報告できたのである。

(2) 生活単元「秋季運動会」の学習を通して

2学期、児童・生徒会の副会長となったK・T児にとって、秋季運動会は初仕事の場であった。閉会式の時に、おわりのあいさつを児童・生徒を代表してしなければならなかったのである。役員選挙の立ち会い演説会で、事前の練習が十分できていなかったため、恥しくて、立候補演説も就任のあいさつも前に出てできなかったといういきさつがあるので、

- ① あいさつのことばをしっかり練習させる。
- ② 練習の場を少しずつ変えて慣らしていく。

の二つに重点をおいて指導した。①について

<生活ノートの母親の記録より>

予行演習も近づき、家でも何回も練習しました。姿勢が悪い、声が小さい、口を大きくあけて、言葉をはっきりと注意するものだから、ブツブツ言ってやり直しをしていました。

は、早くから原稿をつくり、家でも練習させてもらうようにした(上記参照)。②については、クラスの友だちの前で(毎日)→中学部の友だちの前で(学部演技練習時)→学校全体の前で(予行演習)という順序をふんで、場に慣れさせるようにした。予行演習では、全校生徒・教官を前に堂々とあいさつでき、これが大きな自信をつけた。当日は、直前に、組別対抗リレーで負けたくやしきから泣き出すというハプニングがあったにもかかわらず、あいさつは、マイクの高さを直すほどの余裕をもって、はっきりとできたのである。

(3) 生活単元「学習発表会」の学習を通して

この学習では、劇で主役を演ずることが決まったこともあり、劇指導に重点を置いた。その中で

も、自分のせりふ、動作をしっかり覚えることを中心にした。場に慣れることについては、舞台稽古を毎日するので特に配慮しなかった。K・T児はせりふが覚えきれていない間は、動作もほとんどなく、照れかくしに頭に手をやったりなど無意味な動作が目立った。そこで、次のような手だて



を加えた。

- ・舞台稽古では動作を中心に一対一で演技指導する。
- ・パート練習ではせりふの暗記を中心に一対一で指導する。

また、せりふについては、家庭にも協力を頼んだ。せりふが頭に入ってくるに従い、せりふや場面に合った動作が少しずつでき出し、声も大きくなってきた。

発表会当日は、それまでで一番よい出来であり、せりふが出てこなくてもあわてることなく、次のせりふを言ったり、アドリブを入れたりして、機転をきかせることができた(写真)。

5 考察と反省

K・T児の指導実践を通して気づいたことは、

- ① 何度もくり返して学習し身についたことは、自分からすすんで行動に移せた。
- ② 役割(特に2学期児童・生徒会副会長)を持ったことが、行動に自信をつけ、新しい場面でも生きて働く力となって意欲的に取り組めた。
- ③ 学校と家庭が協力して指導することが、子どもの力を伸ばす上で大切であった。

ということである。新しい事でも何度かくり返し学習し、できるという自信がつけば、恥しさや抵抗なく行動に移せるのである。そして、その自信が次の自信を生み、新しい行動へと発展していくのである。つまり、自信を持った言動をさせようとするなら、なるべくいろいろなことを経験させ、1つでも自信のあることを増やす必要がある。そして、その経験は、失敗や敗北感を味わうものであってはならないと考える。そのためには、家庭の協力がとても大切になってくる。K・T児の場合、家庭の協力が大きかったことも見逃せない。また、役職についたことが、行動に度胸と自信をつけさせ、少々恥しいくらいでは行動に移せないということがなくなった大きな要因と考える。

6 今後の課題

現在、家庭と学校が協力して「あいさつをする」ことに取り組んでいる。学校では、馴染みの薄い他学部の先生に対して、家庭では、顔見知りの近所の人に対して自分からすすんであいさつができない。あいさつは社会生活の基本であり、人間関係をスムーズにする第一歩と考えるので、あいさつが自分からできるようにさせたいと思っている。